

ザイトン 泉州

—— マルコ・ポーロの東方 (1) ——

高 田 英 樹*

Zaiton Chuan-chou

— Orient of Marco Polo (1) —

Hideki Takata

キーワード

マルコ・ポーロ、ザイトン、泉州、磁器

0. はじめに

マルコ・ポーロの書によって西方ヨーロッパに初めて伝えられた東方アジアの事・物・人は数多い。といわんよりは、モンゴルの砂漠から北京の大都、紙幣や駅伝システム、グランカン・フビライからセルガモニ・ボルカン仏陀まで、全編がそうであったといってもさほど間違っていない。その中には、後の世界の歴史に跡を残したものも少なくない。その最たるものが、コロンブスをしてイベリア半島から西への航海に向かわせ、アメリカ大陸を「発見」せしめたジパングであったことは広く知られる。ジパングは同書では帰路の旅の最初におかれているのであるが、その出帆の港となったザイトン泉州においても歴史に残る記事が見える。一つは磁器、もう一つは船の隔壁構造である。

くすんだ色の厚くぼったりとした軟い陶器に対して、白く輝く薄く硬い磁器が新たな東洋の宝石として西方でいかに求められたか、18世紀始めマイセンでようやく生産されるに至るまでいかなる努力がなされたか、今なおどれほど高い評価を得ているか、これまた周知であろう。そうした意味では磁器は、ジパングに劣らぬ否時間的にははるかに長い数百年の年月をかけて西方がようやく獲得したモノであった。そしてその特徴から製法まで、かなりの正確さで初めてヨーロッパに伝えたのがマルコ・ポーロの書であった。

磁器については、13世紀当時すでに中東イスラム諸国やエジプトにまで輸出されており、ヨーロッパにもおそらくアレクサンドリアから渡り、後に見るが50年後のポッカッチョ『デカメロン』には早速その記事が登場するのに対して、もう一つの船の構造と技術の記事はなんら注目されるどころとはならなかった。とりわけ、水密艙と呼ばれる隔壁構造の優れていることが認識されて西方の船にもそれが取り入れられるのは、19世紀になってからであった。この記事がそれに影響を与えたという事実はなく、後に確認されるに過ぎないが、先立っていたという意味では磁器よりもさらに1世紀さかのぼる。

*たかた ひでき：大阪国際大学人間科学部教授 (2009.10.5受理)

同書は、稿本によって大きく内容を異にする。本稿では、最も古いF（通称フランス地理学協会版、ベネデット校訂本）を基本とし、多くの異文と独自記事を含むZ（ゼラダ稿本ラテン語版）とR（ラムージョ版イタリア語集成訳）で異同を検証し、必要におうじて他の代表的なテキスト、FG（標準フランス語版）・TA（トスカナ語版）・VA（ヴェネト語版）・P（ピピーノのラテン語版）に当る¹。

1. 町

その書は、ヴェネツィアを発ったポーロー一行がグラン・カンの都大都（北京）に至るまでの往路、大君の使者として諸方に派遣されたという中国、そして帰路に立ち寄った各地を、実際にそのとおりであったかは別として、行程順に並べるという構成になっている。したがって帰路の出港の地であった泉州は、中国の部の最後に位置する²。まず、その町がいかに描かれているか見ておこう。

前の地「フジュ」福州からの道中の描写の後、次のように始まる：

「この五日行程を行くと、ザイトゥンというとても大きく立派な市がある。市には港があり、インドの船がどれもたくさんの商品や高価な商品、高い価値の宝石、大きな優れた真珠を載せてやってくる。ここはマンジの商人たち、つまり周辺の全地域の商人たちが [やってくる]³ 港だ。この港にはものすごい量の商品や貴石が往き来するので、見て驚くべきものである。この市つまりこの港から、全マンジ地方に行く。いいですか、キリスト教徒の地に運ばれるためにアレクサンドゥルあるいは他の所に行く胡椒の船一隻につき、この [ザ] イトンの港には百隻来るのですよ。ここは、最も多くの商品が来る世界の二つの港の一つだからであることをご存じありたい」(F)

ここまでの多くの都市では、偶像崇拜・グラン・カンの支配下・紙幣・火葬・主な産業と商品といったその町の一般的な説明がまずなされるのに対して、ここ泉州ではいきなり港のことから始まる。それだけその存在が大きかった。

大河晋江のほとりにあり、その河口を取り囲むように両側に半島がせり出した深い湾の奥に位置する泉州は、天然の良港であった。唐代、東南アジアやインドとの交易が盛んになると、内陸部の首都圏との中継港として広州・明州（寧波）・揚州とともに栄え、宋代には都が南に遷って来たこともあってさらに発展し、元代には広州を圧倒して中国最大の港となっていた。そのことをこの作者は、西方最大の港アレクサンドリアと並べ、胡椒の船は百倍すると賛嘆した。港そのものの描写は他の各地のそれとさして変わらないが、この比較によって泉州は記憶され、後々まで語り継がれるものとなった。

続いてすぐ、港から上がる税収の説明がある：

「またいいですか、グラン・カンはこの港と町からもものすごい額の税を受け取るのですよ。というのもお教えしておくと、インドから来る船はどれもあらゆる商品とあらゆる宝石と真珠の十パーセント、つまり全てのもの十分の一を与えるからです。船は使用料つまり用船料として、小さい商品だと三十パーセント、胡椒だと四十四パーセント、アロエの樹とか白檀とか他の大きな商品だと四十パーセント取

る。だから商人は、用船料とグラン・カンの税と合わせて、運んでいる全ての半分を与える。このことからしても、グラン・カンがこの町からどれほど莫大な財を手にするか、誰でも分かるに違いない」（F）

これらの数字が、フビライの役人として通商に係わる役目にでもあってその関係上知っていたものか、それとも商人として実際に交易した体験からのものかは分からない。最後の文は前者の可能性も示唆するが、この章における作者は商人の方を想像させる。以上、これら港と交易に係わるもの以外、町についての記事はない。

「ザイトン」Zaitonあるいは「ザイトウン」Çaitun とは、十世紀中ごろ五代南唐の節度使として泉州を所領した留從效（?-962）が、城の周りに「刺桐」の木を植えたことに由来するとされる⁴。この地に多数いたアラビア人・ペルシャ人らイスラム教徒は、その音がアラビア語のオリーブの木<ザイトゥーン>とよく似ているため、好んでその名で呼んだという。刺桐の中国音 tsu-tung / ci-tong とは若干ずれるのはそのためである。半世紀後この町にやってきたもう一人の大旅行家イブン・バトゥータは、その名にもかかわらずオリーブのないことを不思議がっているが⁵、この書にはその木のこともすでに三重に築かれていた城郭のことも出てこない⁶。

作者自ら語るところによれば、帰国直前にインド使節行（1287-89年頃）から還って来ており、その行き帰りと帰国の折（1290年末から91年初）と、少なくとも三度はこの町に滞在したはずである。とりわけ帰国時は、アルグンの妃となるべきココチン姫を伴うペルシャ三使節に同行するもので、おそらくかなりの期間しかるべき筋に留まったことは確実と見られるにもかかわらず、それらに基づく記述はない。商人としてであれ使節としてであれ、この地に滞在したのであれば必ずや接触せずにはすまなかったであろう関係諸機関、とりわけ港と交易を司っていた提挙市舶への言及もない。その名高い市舶司蒲寿庚と見た可能性はないようであるが、さほど年を隔てぬ頃のことであった⁷。

また、約30年後であるがこの地を通ったオドリーコ・ダ・ポルデノーネの記す、「我々フランチェスコ会の二つの僧院」も出てこない⁸。ザイトン司教であったカステッロのベッレグリーノ師（1318年）やペルージャのアンドレーア修道士（1326年）の書簡にも、「さるアルメニア人の婦人」が立派な教会を建立したとある。その教会がいつ建てられたかは記録はないが、これらからする限りその建立はポーロより後となる。それにしても、南門外の港周辺に多数住まっていた色目人の中にはキリスト教徒もかなり混じっており、彼らとの接触の中で多くの情報を得たであろうことが確実に推測されるのであるが、その共同体への言及もない⁹。ここでも、情報源を明らかにしない、個人的な体験は極力語らないという、作者と筆録者ルスティケッロの基本方針が貫かれている。

オドリーコはまた、同市には多数の偶像崇拜の寺院があり、訪問した寺院の一つには「三千人の僧侶と一万一千の偶像」があったと記しているが、同市最大の寺院は開元寺（686年建立）であった。ポーロは各地で偶像崇拜に対する批判を展開しているが、この町では偶像寺院への言及はない。なお、中国最古の本格的なイスラム教寺院清浄寺もあった（1009年建立）が、同様である。

その後Fでは、「彼らは偶像崇拜で、グラン・カンの下にある。ここは人の体に必要な

ものは何でも豊富にある土地だ」と、ようやく定番のメモが一行挟まれて後、次の磁器の話題に移る。ところが、Zではその前に次のような橋の記事がある：

「ザイトゥン港に注ぐ川はとても大きく広く、またとても速く流れているから、その速さのために川床がたくさんできている。つまり多くの地点で多くの支流に別れている。この川に五つのとても綺麗な橋が架かっており、その一番大きいのは、川がいくつもの筋に分かれている地点で長さ三マイルもある。橋は次のように造られている。橋脚は大きな石が次々と重ねられ、次のように組まれている。石は真ん中では大きく、端に行くに従って小さくなる。だから先端は、潮の激しい逆流に対して海に向かっても、川の流れに向かっても尖っている」(Z)

泉州湾に注ぐ大きな川は二つあり、一つはもちろん刺桐城のすぐ西を流れる大河晋江、もう一つは市の東10キロのところで湾に注ぐ洛陽江である。テキストでは flumen <川> と単数になっていることからすると、前者であろう。晋江は、市の北約20キロの南安で藍溪（現西溪）と桃林溪（現東溪）が合流して市の西を南流し、海に注ぐ。後代には土砂の堆積によって10キロも遠ざかってしまったが、当時河口は市のすぐ南にあった。したがって、その後「多くの地点で多くの支流に別れている」わけではなかった。つまり上の文は、大河の多くがそうであるように、河口付近ではいくつもの川筋に分かれてその間に砂州ができていたことを言ったものである。この文が後世に磁器の産地をめぐる混乱を惹き起すことは次節に見る。

中国でも有数の花崗岩の産地であった泉州は、宋代多くの石橋が架けられた。現博物館には、「宋代泉州十大名橋」なる表が掲げられている。建造の古い順に、1. 洛陽橋（万安橋1053-59年、360丈）2. 安平橋（西橋1138-52年、811丈）3. 玉瀾橋（1131-62年、1000多丈）4. 蘇埭橋（1142年、2400丈）5. 普利大通橋（1142年、220多丈）6. 東洋橋（東橋1153年、660丈）7. 石筍橋（浮橋1161-66、80多丈）8. 海岸長橋（1165-73、770多丈）9. 順濟橋（新橋1211年、150多丈）10. 烏嶋橋（盤光橋1253-58年、400多丈）となっている。地点の明記はない。長さは大よその数値であろうが、一応の参考にはなろう。

これらのうち、洛陽橋（現834m）は上述洛陽江の河口に、安平橋（現1200m）は市の西南40キロの圍頭湾の水路に現存する。晋江には、石筍橋（現245m）が西の臨漳門の、順濟橋（現338m）が南の徳濟門（南門）のすぐ外に架かり、中央部分は崩壊しているが両端は昔のまま残っている¹⁰。上の「五つの橋」というのがどれにあたるのかは不明であるが、これら二つは確実にその中に含まれるであろう。とりわけ、「川がいくつもの筋に分かれている地点」にある「長さ三マイルもある一番大きい」とは、長さ（3マイル約4800m）からすれば蘇埭橋（1丈3mとして約7200m）に当るのかもしれないが、どちらの数字もいささか信じがたい。順濟橋より下流には古来の橋は残っていない。同書では地理概念はさほど厳密とは言えず、地名とその指す地域は往々にしてきわめて漠然としており、この五つの橋の中には、あるいは洛陽橋と安平橋も数えられていたことも考えられる。とりわけ前者は、前述のごとく晋江ではないが同じ湾に注ぐ川に架かっており、同書北京の部で詳述されている盧溝橋、河北省の趙州橋、広東の広濟橋とならんですでに名高かった。

これらの橋は、石で筏型の基礎を造って川に沈め、その上に石を積み上げて橋脚となし、川の流れに対しても海からの潮の逆流に対しても耐えられるようその先端を舳先型にしたもので、上の描写は正確である¹¹。現存する上述二橋では、より下流にある順濟橋はここに記されているとおりの両端が尖っているが、それより約3キロ上流にある石筍橋は上流に向かってのみで、下流に向かっては丸くなっている。街も城壁の描写もないのに、橋についてこれほど詳しいのは、よほどそのことに興味を引かれたのであろう。

この記事はZ（と一部R）にしか見えないが、カンパリク（北京）でもシンドウフ（成都）やキンサイ（杭州）でも橋には特別な関心を示しており、作者は同一人物であってもおかしくない。もし同書の主たる作者がマルコ・ポーロであったなら、この記事も彼の手になった可能性が高い。しかし同書は、いくつかの時期に何度かにわたって編纂されたと見られ、この記事が最初からあったかは確定が難しく、必ずしもFその他の版で省略されたことにはならない。他にも同様なケースを後に見る。

Z（とR）は続いて、「この市に上インディアから、前に述べたように自分の体につき針で絵を描いてもらいに皆やって来る」と、刺青についての一文がある。「上インディア」とはインドシナ半島の地域、「前に述べたように」とは内陸部の「カンジグ地方」（第128章、八百媳婦蛮）を指す。泉州は中国南部最大の国際都市であり、海外の各地と往来がありまた多数の外国人が居住していたが、その中でなぜ刺青のことだけが取り上げられたかは解されがたい。

その後、どの版も磁器の記事がくる。上に見た港の商品の中には挙げられていないが、陶磁器は同港の主要な輸出品の一つであった。作者は17年にわたる中国滞在中どこでも目にし、日常の食事にも使ったことは疑いないが、ここが初出である。日常生活や衣食住についての記事は全編で少ないが、磁器の価値、ありふれた日用品でないことを作者は見抜いていた。

2. 磁器

2.1 ポルスレーヌ

Fは次のようにある：

「さらにいいですか、この地方のティヌジュという市では大小のポルスレーヌの碗が造られ、それは人が述べうる最も美しいものです。また、その市以外の他のいかなる所でも造られない。そしてそこから世界中に運ばれる。またいっぱいあってとても安く、一ヴェネツィアグロスで誰もよりうまく述べることもしかないほど綺麗な碗が三つも得られるほどです」（F）

産地「ティヌジュ」については次節で検討する。この「ポルスレーヌの碗」escuelle de porcellaineが新たな陶器つまり磁器を指すことは、terre cuite <テラコッタ>やceramique <陶器>に当る語を使わず新語を用いていることから見て明らかであろう。escuelleは<広縁のない半円形の器>、つまり碗や鉢を指す。当時中国で生産された陶磁器の多くはその種であったという事実と一致する。porcellaineはイタリア語porco 豚>porcella 子豚>porcellana からで、もとは<豚の陰門>を指したがその形状の類似からく

タカラ貝>をも意味し、やはりその曲線の形状とすべすべとして滑らかな材質感からこの新たな器を指すのに使われたものである¹²。

作者は、その器が「得も言われぬほど美しい」と二度も強調し、しかも大量にあって安いことを故郷の通貨を例に請合う。確かにその実物を目にし手に取り、もちろんヴェネツィア硬貨ではなく中国紙幣であったろうが、帰国の折には記しているとおりにきつといくつか買い求めて持ち帰ったと想像しても不当ではあるまい。が、死後の遺品リストの中には見当たらない¹³。Fは以上だけで、それがどのように美しいのかどんな色や形をしているのか、さらにはいかに造るのかの説明はない。ところがそれが、Zにはある。Fと同じ前の文に続けて：

「その碗は次のような土から作られる。すなわち、その市の人たちは泥や腐蝕した土を集めて山と積み上げ、三十年、四十年と動かさないでそのままにして置く。するとその山の土はその長い間に精錬されて、それから作られた器は青色を帯び、とても輝いて殊のほか美しい。またご存じりたいが、その土を集める時、それは自分の子供たちのために集めているのである。つまり、精錬のために寝かせておかなければならない長い期間ゆえ、それで金を儲けることも仕事に使うことも期待できず、それから利益を手にするのはその後生きる息子の方だからである、云々」(Z)

すなわち、「青色」*colorem accuri*で「輝く」*relucetes*ように美しいと。とすると、青磁である。すでに宋代には大量に生産され始めていた青磁は、緑とも青ともつかぬ淡く美しい色合いを帯び、その肌はつるつるとしてまさしく輝くがごとき光沢を放っていた。製法については、「泥」*limum*とは粘土のことで、中国では陶土は「泥」と呼ばれていたこととも関係があるのであろう。「腐食した土」*terram putridam*というのは明解でないが、泥つまり粘土が水気を帯びた軟らかい土であるのに対して、風化して水気を失いボロボロになった硬い土のことではないか。そうであれば、磁器を作るのに不可欠な二種類の土、すなわち成形するための粘土つまり陶土と、焼成時に溶解して融媒剤となり強度を与える陶石とに対応する。時代は下るが『天工開物』(1637年)でも、景德鎮の場合を例にとって、磁器は軟らかい「糯米土」と硬い「粳米土」の二つを混ぜ合わせて初めてできることを記している¹⁴。18世紀始め、ようやく中国陶磁についてヨーロッパに本格的に紹介したイエズス会士ダントルコールも、磁器の胎が「高嶺」(カオリン)と「白不子」(ペイトンツ)の2種の土から合成されることを述べる¹⁵。

その後これら2種の土、すなわち陶土と細かく砕いた陶石を混ぜ合わせたものを水を張った甕に入れて精錬し、その上澄みを取って素地を得ることを、『天工開物』もダントルコールも伝えるが、ここではその土を数十年山と積み上げてその間に精錬するという。当時はこのような自然に任せる方法が取られていたものか。30年40年というのは大袈裟にしても、年月と忍耐を要する仕事であることを強調するのであろう。そして最後は「云々」と終る。とすると、Zは土のことだけで、それを使ってどのように作るかの話はない。釉も窯も出てこない。が、最後の「云々」と省略された部分にそれがあったことも考えられる。事実、Rにはそれがある：

「ザイトゥム港に注ぐ川はととても大きく広く、流れは急で、キンサイ市から来る川

の支流をなす。その本流から分かれるところにティングイ市がある。そこについては、磁器の碗や皿が作られることの他は何も語ることはない。彼に語られたところによると、次のようである。鉾山のような所のある種の土を集めて大きな山となし、三十年、四十年と風・雨・日にさらし、動かさない。その間に土は精練され、かの碗を作ることができるようになる。その上に好みの色を塗り、竈で焼く。その土を集める者はいつでも、子あるいは孫のために集めるのである。同市ではとても安価で、したがってヴェネツィアグロッツで碗が八つ買えるだろう」(R)

FともZともかなり異なる。最初の文については次節で取り上げる。碗に「皿」piadene が加わっているのは、編訳者ラムージョがRの底本として使った5種類の稿本のうちの一つ、もう一つのヴェネト語版VBから取ったものである。「彼に語られたところによると」はラムージョの補筆である。Zの「泥や腐蝕した土」が「鉾山のような所のある種の土」と変っている。「ある種の土」una certa terraは「泥や腐蝕土」を疑問に思ったか理解できなかった編者が曖昧に言い換えたものであろうが、「鉾山のような所の」come di una mineraは事実在即しており、オリジナルからのものである可能性も高い。「風・雨・日にさらし」も矛盾しない。問題は其の後の、「その上に望む色を付けそのあと竈で焼く」であるが、これも磁器の製法として間違っていない。

ところがである、「そのあと竈で焼く」e poi le cuocono in la fornaceはそのとおりだとしても、「望む色」li colori che voglionoを「上に付ける」danno di sopraとあり、しかも「色」li coloriは複数である。この時代13世紀後半は、翌14世紀には青磁に代って中国陶磁器の中心となるコバルトブルーの顔料で染付けた青花はおそらくまだ登場していなかったし、多色の絵付け磁器はもちろんまだなかった。ポーロがザイトンで磁器を目にしたのが帰国前の1290年つまり13世紀末であったとしても、色合いは多様であったが単色であり、その上に絵を付けることはなかった。赤絵の釉裏紅や多色の五彩磁器が登場するのは明代15世紀から16世紀である。すなわち、そのことを言っているのであれば、「その上に望む色を付け」はマルコのオリジナル文ではありえず、後世に加筆されたことは明白である。

しかしながら、青磁といっても淡い黄緑色から深い青色まで、窯場によりまた時代により様々に色合いが異なる。しかもそれが、生地のと釉薬によりまた温度によって種々に変化を見せる。それを、「色を付ける」と見間違ったことはありえる。もしそうであれば作者は、それが高温で焼くことによって自然に発色するものであることを理解していなかったことになる。あるいはまた、昔からあった彩色陶器、例えば唐三彩と混同されたことも考えられる。かくしてここでも、オリジナルはどうだったかの問題が生じる。磁器の美しさ・多さ・安さを述べるに止どまっているF、土と青色と輝きをも紹介するZ、そして鉾脈と好みの色と竈での焼成まで記すR。オリジナルにはR（つまりその底本Z¹）¹⁶のようにあったのが、ZそしてFへと省略されていったのか、それとも最初はFのようであったのが、ZそしてRへと加筆されていったのか。

また、単に後のものほどより詳しいというのではなく、ここには明らかに知識の深まりと記述の発展があり、しかもRの場合は時代上の変遷にまで対応しているようであった。とするとこれは、同一記事の稿本による異なりではなく、別の手によって書き換えられた

可能性が高くなる。一方、ZからRへは逆に知識の後退もあり、Z「泥や腐食した土を集めて山と積み上げ」は、R「鉱脈のような所からある種の土を集めて大きな山となし」と曖昧化され、Z「それから作られた器は青色を帯び、とても輝いて殊のほか美しい」は見えない。Fがポーロのメモを基に編まれたとすれば、ZとRは、それが彼自身のものであれ他の誰かのものであれ、別の情報や資料をも加えて書き直されたことを推測さす。

これらは、上のR「望む色を付ける」を、発色による色の変化を誤解したものと取るか、染付さらには釉裏紅や五彩まで指したものと取るかで決まる。前者であればポーロの筆の範囲に留まり、後者であれば後世の誰か、おそらく編者ラムージョの加筆が明確となる。

2.2 ティンジュ

この記事はもう一つの問題を抱える。その町「ティンジュ」がどこか、いまだ確定しない。磁器の産地であればすでに名高かったであろうと予想されるにも拘わらず、全編で今も謎として残っている地名の一つである。主要テキストでは次のように綴られている。F: Tinugiu (ベネデットは Tiungiu に読んでいるが、写字では n と u は判別しがたいことが多く、F 写本では -un- よりも -nu- に近い)¹⁷、Z : Tinçu, FG: Tiunguy, TA: Tinugise (Tinugui に次の語 se がくっ付いたもの)、VA: Linigui (t の l への誤読)、P: Tingui, R: Tingui (-iu- と -ui- も写本では i の上の点打たれないため判別しがたいことが多いが、この場合は州 -chou の音写であれば -giu が正しい) である。これらから、最もありえる形として Tingui が想定される。

前に見たごとく、Fには「この地方のティヌジュという市では大小のボルスレーヌの碗が造られ」とあるだけで、それ以上の説明はない。Zも「この国と地方にティンズという市があり」と、「国」patria が加わっているだけで実質的に変わらない。この「地方」provence とは、文脈からすれば泉州路かその属する福建省と考えられよう。磁器の産地としては、泉州 Chuan-chou / Quan-zhou であれば徳化 De-hua が、福建省内であれば他に建寧府 Jiang-ning-hu の建州 Jiang-zhou が知られる。しかし、建寧府は前章に「ケンリンフ」Quenlinfu として登場するがそうした記述はない¹⁸、徳化窯は白磁である。そこで、同書での用法に則って広く「マンジ地方」と取ると、青磁の代表的産地として浙江省処州 Chu-chou / Cho-zhou の龍泉 Lung-chuan / Long-quan と江西省饒州 Jao-chou / Rao-zhou の景德鎮 Ching-te-chen / Jing-de-zhe が知られる。

ところが、Rには全く違う説明があった。前に引いたが、「ザイトゥム港に注ぐ川はとても大きく広く流れは急で、キンサイ市から来る川の支流をなす。その本流から分かれるところにティングイ市がある」というのである。ザイトンの川晋江とキンサイ杭州の川錢塘江は遠く隔たっており、本流と支流の関係にはなく、川の説明としては全く誤っている。しかし、磁器の産地の説明としてはなにほどこかの事実を伝えると見なし、マルコのオリジナルではこの地方の川、つまり杭州の錢塘江・福州の閩江・泉州の晋江、それに同書には登場しないが温州に注ぐ南溪も、同じ地域すなわち現武夷山脈に発することを言ったものであり、それがラムージョのテキストでは上のように混乱した形で採録されたものと解釈された。

そこで「ティンジュ」を広くこれらの地域に求め、諸家によって上述の徳化 Te-hua（ポーチェ）、景德鎮 Ching-te-chen あるいはその管区饒州 Jao-chou（マーレイ、ユール、ペンザー、ベネデット）または洪州 Huang-chou（シャリニョン）、龍泉 Lung-ch'uan の古名劍川 Chien-ch'uan（ヒルト）、その管区処州 Ch'o-chou / Cho-zhou（ペリオ）等に比定された¹⁹。支流が本流から分かれるところというのは、どの川であろうとそうした地点を持たない川はないし、それが泉州で記されているのは、日本の有田と伊万里同様、積出し港だからである。しかし、産地であることを優先させて比定された結果、それら地名は必ずしもティンジュ Tingiu とはよく一致しなかった。また、これら先学の諸説はいずれも19世紀から20世紀始めにかけてのもので、同地域の磁器の産地として上記以外に知られるところは少なかったこともあった²⁰。

これらに対して愛宕は、ティンジュを泉州 Ts'uan-chou 自体に求め、その論拠に次の点を挙げる²¹：

- (1) 同市を指すのに作者は常にザイトンの名で呼んでおり、泉州なる語は用いられていない。したがって、泉州は刺桐城とその市ではなく、全く別の地名が同地方全体として理解されていたはずである。
- (2) ティンジュ市は、テキストによれば、ザイトン港に注ぐ大河が多くの支流に分かれ長さ3マイルの最大の橋が架かっている地点にある。その地点とは、「嘉慶重修大清一統誌」巻428に16水が合流すると記されている、晋江が入海する県の西南2里の東山渡に他ならない²²。そこには五つの橋が記載されている。
- (3) 従来泉州近在あるいは福建地方には徳化窯と建州窯しか知られなかったが、解放後の発掘と研究によって泉州管内にも晋江県碗窯郷窯（泉州城の東北8キロ）、晋江県瓷窰鎮窯（同西南12キロ）、南安県石壁窯（碗匣山）らの宋代の窯が発見され、当時磁器の生産があったことが確認された。
- (4) Tyunju は Ts'uan-chou（泉州）と通ずる²³。

したがって、1）ティンジュは泉州のどこかの地を指して用いられており、2）その地とはテキストの記述と一致する泉州市近郊の東山渡であり、3）事実泉州には宋代から磁器の生産があり、それらは一括して泉州磁器とか泉州窯と呼ばれていたであろう。以上から、4）ティンジュとは泉州に他ならない、というものである。

確かに、泉州管内にも磁器のしかも一応の規模の当時の産地が確認された以上、もはや他の地に求める必要はないかもしれない。音も似ていなくはない。しかしそれが、愛宕のいう東山渡という地に確認されたわけではないし、泉州近辺で多くの支流が合流する事実はない。東山渡というのは、引用されている上述清代の史書の文「皆達於縣西南二里東山渡入海」からする限り、河口のことである。河口に窯場があったとは考え難い。しかも、河口の町ならザイトンそのものであって、それを他の名で呼ぶ必要はない。

そもそも、愛宕がティンジュ泉州説の論拠に挙げる上の（2）、つまりその町は大河（晋江）が多くの支流に別れる地点に位置するというのは、テキストにベネデットの集成訳²⁴を用いたがための誤解であって、諸写本の原文は全く異なる。

繰り返しになるが、Fでは港と税収の記事と、人々が偶像崇拜でグラン・カンの下にあ

り生活物資が豊富にあるとの短い文の後、Zの川と橋の記事はなく、すぐ「この地方のティヌジュという市で」*en ceste provence, en une cité que est apellé Tinugiu*と続いていた。つまり、川との関連はない。一方Zでは、Fと同じ港と税収の記事の後独自の川と橋の記事があり、その後偶像崇拜とマグヌス・カンと生活の愉しみについての短い文を挟んで、インドから刺青をしにたくさんやってくるとの記事があった。そしてその後、「またこの国と地方にはティンズという市があり…」*Et etiam in hac patria <et> provincia <est> quedam civitas nomine Tinçu…*と始まっていた。つまり、Zでも川とティンジュ市には直接の関係はない。しいて探せば、その川があるのと同じ地方かもしれないという関係だけである。

ところがRは、港と税収の記事の後、先に偶像崇拜と豊富な食料と刺青の話があって、その後「ザイトゥム港に注ぐ川はとても大きく広く、流れは急で、キンサイ市から来る川の支流をなす。その本流から分かれるところにティンギ市がある」*Il fiume che entra nel porto di Zaitum è molto grande e largo, e corre con grandissima velocità, ed è un ramo che fa il fiume che viene dalla città di Quinsai; e dove si parte dall'alveo maestro vi è una città di Tingui…*とある。しかしこれは、後世の誰かほぼ確実に編訳者ラムージョの要約と補筆である。〈とても大きく広く流れは急で〉は、Zと一致する。〈キンサイ市から来る川の支流をなす〉は、前章「フジュ」で同市福州はザイトゥム港に注ぐ川の上流6日行程のところに位置させられており(F・Zとも)、しかもキンサイ(杭州)からフジュに至るルートが明記されていないことから来る混乱である。編者は、作者が杭州から泉州までずっと続く川沿いか大運河の延長のルートをたどったと想像したか、あるいはキンサイとフジュとの混同である。〈その本流から分かれるところに〉は、その後のZ「つまり多くの地点で多くの支流に別れている」以下を要約省略して「またこの国と地方に」に取って代え、「ティンズ市がある」に繋いだものである。つまり、ラムージョの全面的書き換えである。

そして20世紀の始め、Fを底本としそれにZ・Rを始めとする主要なテキストの異文を集成してイタリア語訳したベネデットは、このRの文を信頼し、それをZの「…多くの地点でいくつもの支流に分かれる」と「その川にはとても綺麗な五つの橋があり…」との間に組み込んだ²⁵。さらにその記事の後、「またこの地方にはティウンジュと呼ばれる市があり、タカラ貝の碗が作られる」と、今度はF・Zの文に戻った。そのため市は、初出の方が*la città di Tiungiu*、後出の方が*una città chaimata Tiungiu*と、冠詞が逆になっている。そのちぐはぐさは問わないとしても、かくして磁器の町ティンジュはザイトンの川と結びついてしまった。リッチによるその英訳²⁶を和訳した愛宕²⁷が、これに惑わされたのも無理ないことであった。

愛宕の論拠の(2)は以上に立脚したものであり、根拠をなさないどころか、それに基づくとすでに見たごとく晋江の河口がティンジュの町となり、蛇足どころか贅蛇であった。彼のティンジュ泉州説は、論拠の(3)つまり泉州管内に磁器の古窯が存在していたことが発見されたということだけで十分なのであって、それは先達たちが知りえぬ事実であった²²。管内に磁器の町があり、それが論拠(1)のように、泉州(つまり愛宕によればティ

ンジュ）という名前で理解されていたとしても少しもかまわない。

しかしながら、管内に磁器の生産があり、その産地の町が泉州の名で理解されたことはありえるとしても、それは近年の発掘でようやく確かめられた程度のもではなかったか、竜泉窯や景德鎮ははるかに規模が大きく、夙に名が知られていたのではなかったか。テキストには、その素晴らしさについて最大級の賛辞が述べられ、「その市以外の他のいかなる所でも造られない」、そして「そこから世界中に運ばれる」、また「いっぱいあってとても安い」とある。これからする限り、小さな無名の窯場ではなく大規模な著名な町である。製品の積出港であったザイトン泉州がその産地と間違えられたことは考えられるが、「またこの（国と）地方にはティンジュという市があり」（F・Z）という文は、はっきりとザイトンとは別の町を指している。

しかし、これらの条件を全て満たす町はない。龍泉と処州も景德鎮と饒州も音が一致しないことはすでに見た。かといって愛宕の論拠の（4）、泉州 Tsuan-chou も Tingiu と似てはいても一致しない。第二音州 -chou は -giu でよいが、第一音泉 tsuan-/chuan- は tin-/tiau- とは遠い。先学たちがこれを採らなかったのはそのためである。音だけなら、川を隔てた西隣の町晋江 Jin-jiangの方がまだ近い。磁器の生産もあった。が、県であって晋州という地名はない。晋江を晋州 Jin-chou とした可能性はあるが、泉州と同じく大きな産地ではない。では、ティンジュとはどこか。

青磁 ching-tzu / qing-ci のことではないか。あるいは磁を州と聞いて、青州 Ching-chou のように誤解したのではないか。上に引いた文からする限り、磁器について基本的に誤りはないが、体験談あるいは製造現場からの報告とはとても見えない。F は一般的なことばかりであまりにも漠然としているし、Z も正確さと細部の緻密さを欠く。R はこの作者の文か疑わしい。つまり作者自身、産地がどこかはっきりとは知らなかった。「この（国と）地方にある」としかししない F・Z の自信なげな漠然とした言い方が、そのことをよく表している。説明を聞いたときにその器を指しておそらく頻繁に使われたであろう青磁という言葉、産地の地名と誤解したとしても無理からぬであろう。

では、作者の頭の中でティンジュに想定されていた産地はどこか。「この地方」を広くマンジュと取って、青磁で最も知られた龍泉窯と考えるのが妥当であろう。その点では、その管区処州 Ch'u-chou (>Ciugiu>Tiugiu)>Tingiu とするペリオ説が一番魅力的である。が、龍泉と処州は東西に80km 離れており、処州には窯場はない。また龍泉の場合は、その名が圧倒的によく通っていたためか、龍泉窯とか龍泉磁器・青磁と呼ばれ、処州の語を冠して呼ばれることは一般にはなかった。さらにまた作者は、杭州から福州・泉州へは、銭塘江沿いに遡ってタンピンジュ（東安郡・富陽）—ヴジュ（睦州・建徳路）—ギュジュ（婺州）—チャンシャン（常山）—クジュ（信州）と西寄りの道を取っており、処州と龍泉は通っていない²⁹。これらからして、作者が処州の名を耳にすることがあったか、知っていたか疑わしい。ではなぜ龍泉 Lung-ch'uan でないのかの問題であるが、上に述べたごとくその地には至っていないため分明的でなく、その産品を指して呼ばれる青磁 ching-tzu の方を産地と理解したためではあるまいか。

ところで、この「ポルチェッラーナ」porcellana は、50年後ボッカッチョの『デカメロン』に登場する。その百話の中でも最も秀逸なものとして知られる第6日第10話「チポzza修道士の話」は、フィレンツェ聖アントーニオ教団修道士の東方聖地巡礼譚であるが、彼はその旅を次のように語り始める³⁰：

「いと若かりし頃私は、上司から日の現れるところに派遣され、ポルチェッラーナの特許状を手に入れるべく努めるようはっきりと申し渡されました。それは、たとえ印を捺すのは全くタダにしても、私どもよりずっと他の人たちに利益になるのです」

ここでは「ポルチェッラーナ」il Porcellana は、「日の現れるところ」すなわち東方の代名詞として用いられており、自分はその地あるいは国の「特許状」を獲得するために派遣された、しかしその特許状は自分たち聖職者にとっての布教の許可よりも、「他の人たち」つまり商人たちのために通商の許可としてより利益になる、というのである。

しかしこの語には、マルコ・ポーロの書に登場する二つのポルチェッラーナ、すなわちカラジャン大理やインドで実際にお金の代りに使われていたタカラ貝そのものと、その貝から連想されたこの磁器のことが掛け合わせて意味されている。前者は、貝が貨幣として使われることへの驚きと不信であるが、後者は、豚の陰門をも意味するというその語へのからかいを踏まえたうえで、元商社員であった作家ボッカッチョが、当時14世紀中頃にはアレクサンドリアを経てヨーロッパに流れ込んでくる東方産の品物の中に、どこにでもある陶器とは異なる硬く引き締まって白く輝く新たな器があり、それが競って求められることをはっきりと知っていたからであった。

かくしてこの話は、ポーロのザイトンの記事を踏まえて、近代に入って古代の絹・中世の胡椒に劣らず熱烈に求められることになるこの中国の商品、磁器に対する憧れを予告するものとなっている。そしてこの〈ポルチェッラーナ〉は、ポーロが最初に造った語ではなかったが、その後西欧各国語に取り入れられ、英語〈ポースリン〉porcelain を通じて磁器を指す一般語として使われるに至ったことは指摘するまでもあるまい。

磁器の記事の後、F「この市の人たちは独自の言語をもっている」と、ごく簡単ながらうやく中国の言語事情が言及される。中国の部の最後ということでここに置かれるものであろう。これもFとZ・Rで異なる。Fは上の文だけで、おそらく福建方言、閩南語のことであろうが、どのように独自なのかの説明はない。一方Zは、「ところでご存じありがたいが、マンチ地方全体で一つの話し言葉と一つの文字の書き方が用いられる。しかし言葉は地域ごとに異なりがあり、ちょうどロンバルディア人、プロヴァンサル人、フランス人等々の俗人のあいだで同じである。しかしながら、マンジ地方ではどの地域の人々も他の地域の人々の言葉を理解することができる」（ほぼ同R）と、共通の言語と文字のあることが示唆される。しかし、ここでもその具体的説明はない。

作者が本当に17年にわたってこの国にあったのであれば、たとえペルシャ語並みでなくとも日常生活に不自由な程度には中国語に通じ、独自の文字、漢字の存在も知らなかったことはありえないと思われるのであるが、その言語や文字の解説はないし、漢字を指す

語はついに出てこない。かくしてポーロは、磁器に続いて漢字の最初の紹介者となる機会を失った。

この後、これで中国の部を了えてインドの驚異に移ることを告げて章を閉じる。

3. 船

中国の部は以上で終わり、その後「インディエの巻」と題される帰路の部が始まるのであるが、その最初の章³¹では、「まずはそこに往来する商人たちの船のことから始めよう」とあって、船について語られる。水の都ヴェネツィア出身、それにインド使節行あるいは帰路の航海に泉州から乗った体験に基づくことは確実であろうことからして、その詳細正確さは磁器に勝る。中国船の紹介そのものはもちろん西方ヨーロッパにとって最初のものであったが、その船体とりわけ隔壁板の説明は、19世紀の始めに西方でも取り入れられるまで、数百年先立つものであった。もっともその説明は、広く普及したPを含むF系稿本にはなく、R（16世紀中頃）とZ（再発見は20世紀に入ってから1932年）にしか見えないという事情もあってか、近年まで注目されることはなかった。

3.1 隔壁板

Fでは次のように始まる：

「さてその船は、今からお話するように造られていることをご存じ下さい。いいですか、樅という木と松で造られているのですよ。甲板が一つあり、その甲板の上にはたいてい六十もの部屋があり、そのそれぞれに商人が一人楽に居ることができる。舵を一つと帆柱を四本もつ。多くの場合さらに二本加え、これは望む時にいつでも取り外しができる」(F)

つまり、「樅と松」の船材と「甲板・居室・舵・帆柱」の全体構造の概略である。以下に中国船独自の構造や技術がいくつか登場するのであるが、ここではまず、「望むときにいつでも取り外しができる帆柱」が出ている。川舟では、橋の下をくぐるよう折り倒せるようになっていた。舵も操作しやすい平衡舵が使用されていたし、碇も木と石を組み合わせた独特のものであったが、これらは指摘がない。次いで、Fでは船板の止め方の説明が来る：

「次のように止められている。すなわち、全て二重つまり二枚の板が重ね合わ[され]、回りもすっかり二重に重ね合わさっている。外と内から詰め物がされ、鉄の釘で止めてある」(F)

「鉄釘」で止めるのもその一つで、板と板を繋ぎ合わせる「縫釘法」と呼ばれた。西方では皮製のロープや植物繊維の縄で縛るだけであった。上の二つの文の間に、ZとRでは次の記事がある：

「さらにいくつかの船つまり大きいのは、内部に十三もの艙、すなわち堅固な板が一緒に嵌め込まれた仕切りがある。したがって、もし偶然船のどこかの個所が破れると、つまり岩に衝突したり、ある種の魚が中にある餌を求めてぶつかって船を壊したりすると——こうしたことはよく起こり、実際、船が夜航行していて、鯨の近

くで波を立てながら通ると、鯨は波が白く動いているのを見て食べ物だと思い、突進してきて船にぶつかり、よく船のどこかに穴を開けるものだ——その穴から水が船底に流れ込む。しかしそこはいつも空にしてある。船員は船のどの個所が破れたのか見つける。次に、浸水した船倉の荷を隣りの船倉に移して空にする。船倉はしっかりと分け隔てられているから、水は一つの仕切りから隣の仕切りに移ることはできない。そして船のその個所を修理し、避難させてあった荷をそこに戻す」(ほぼ同 R)

1274年、泉州湾の干潟后渚から宋代の船が出土した。そしてそれには、まさしく13の仕切りがあった。かつての海外交通史博物館であった同市の開元寺に展示されている船に、今もそれを確認することができる。

これは堅固な板を積み重ねた隔壁で船の内部を仕切った水密艙といわれるもので、中国ではすでに唐代の船から見られる³²。ここに記されている浸水時の安全性と積荷の取り扱いの便宜以外にも、骨組みとして船の強度を増し、建造行程の簡素化に貢献した。ヨーロッパの船がこの隔壁構造を持つのは、ニードムによれば、ロンドン滞在中に見聞した中国船にヒントを得たサミュエル・ベンサムによって、19世紀に入ってからのことであった³³。したがって上の文は、ヨーロッパが5百年後に獲得することになるその基本構造を最初に紹介したものとなる。この記事はZとRにしかなく、それを欠くFその他の稿本の価値はその意味で半減する。

この文の後、どの版とも上に引いた船板の止め方の説明があって、次いで瀝青の話が続くのであるが、その中にも小さいながら泉州ゆかりの事物が登場する：

「瀝青がないから、瀝青で塗られていない。これからお話するようにして塗る。つまり、彼らには瀝青よりもいいと見える別のものがある。なぜならいいですか、石灰と細かく刻んだ麻を取り、それをある樹の油で練るからです。これら三つのものを一緒によくこねると、いいですか、瀝青のようになるのですよ。で、それを船に塗る。すると、瀝青と同じような効果がある」(F)

この「ある樹の油」*un oleo d'arbres / quodam oleo arboris* とは、桐油のことである。油桐の種を絞った油で、乾燥性が高かった。市中の刺桐とは種類を異にするが、中国南部の山野に多く自生する。麻糸を搗き解したものと石灰をその油で練り、優れた粘着性と防水性を得た³⁴。Un oleo と不定冠詞になっていることからして、作者はその油が何の樹から採られるのか知らなかったか、あるいは知っていてもそれに当る言葉がヨーロッパ語には見当たらなかったのであろう。事実、桐はヨーロッパにはない。これからするかぎり、作者は市の名前ザイトン刺桐 *ci-tong* の由来を知らなかったと見受けられる。あるいは、ザイトンがアラビア語でオリーブを意味することを知っており、それに幻惑されたか。

また、この「石灰」は牡蠣殻を焼いた粉のことで、これも近海で豊富に採れた。同書では指摘されていないが、前述宋代泉州の橋には、川底にも石を並べた基盤と舟形の橋脚（筏型基礎）と並んで、それら土台と橋脚の石の接着に生きた牡蠣がそのまま使われた（牡蠣固基法）。

3.2 櫓

次いで、水夫の人数や積載量つまり漕運の説明に移るが、Fには奇妙な語が使われて、中国船のいま一つの特徴を伝えている：

「またいいですか、これらの船は二百人の水夫を必要とするが、とても大きいので胡椒を五千籠、あるものは六千籠も運ぶのです。またいいですか、櫓すなわち櫓で進み、一つの櫓に四人の水夫が要る。これらの船は、胡椒を千籠も運ぶとても大きい舳を備えている。しかしいいですか、これは四十人の水夫を伴うのですよ。これらは櫓で進み、また何度も大きい船を曳くのを助ける。これら大きい舳を二つ伴っているが、一つはもう一つより大きい。さらに、停泊したり荷を載せたり大きい船の用をたしたりするのに、小舟を十も引き連れている。これら小舟は全て船腹の外に繋いでいる。またいいですか、二つの大きい舳も小舟を伴っているのですよ」(F)

「櫓」と訳したが、原文は *elle allant con avron, ce est cun remes* <これらはアヴロン avron つまり櫓で進む>とある。avron (<aviron) とは reme (<rame) <櫓>と同義であるが、後者がギリシャ・ラテンに起源する櫓を指す通常の語であるのに対して、前者は中世フランス語 *avironer* <回す>に派生する語であり、用法に差はないが、それでもその語源のニュアンスの違いは残している。すなわち作者は、中国船の推進具が西方の櫓つまりオールとは異なることを言いたかったのであり、それを通常の reme に対して別の語 avron で言い表そうとしたのではないか。その違いの表現に十分成功しているとは言い難いが、櫓を漕ぐ動作は櫓と全くと違っていいほど異なる。

櫓がオール回転させて前から後ろへ水を掻くことによって推進力を得るのに対して、櫓は水中で左右に動かすことによって揚力を発生させて推進力とし、それだけ効率がよかった。櫓が水上と水中を往復し、その力の半分しか推進力に替えられないのに対して、櫓は常に水中にあって反転し、その力の全てを推進力に転換できることでも優れていた。つまり、近代のスクルーと同じ原理である。櫓とも書かれることから分かる通り通常船尾に設置されるが、大型船では左右の舷側にも設置した。作者は、ここ泉州だけでなく、そこに至る途上の町や運河で何度となく目にしたのはずであり、ヴェネツィア出身でなくとも、その違いに気付かぬはずはなかったことであろう。現に、半世紀後この地方を旅したイブン・バトゥータはこの違いを、「漕手たちは船の中央にいて、直立したまま櫓を漕ぎ、一方、乗客たちは船の前方部と後方部にいる」と観察している³⁵。

当時の中国船には、「蒙古襲来絵詞」や「清明上河図」に見られるごとく、船尾にしか備えていないものと舷側にも備えているものがあった³⁶。船尾の軸受けの他に、甲板上の船べりに穴が点々と描かれているのが後者である。作者の乗った船がどうであったか明記はないが、船の大きさと水夫の多さからしておそらく両方あったと想像される。泉州の出土沈船は甲板から上がなく、確認されない。

もともと櫓は、河川や運河また海でも波の穏やかなところではきわめて有効であったが、波の荒い外洋では先端が波に跳ね飛ばされてその効果を発揮できなかった。また、前進しできないこと、漕ぎ手の安定性を欠くことなどの欠点があった。西方にはついに取り入れられることはなかったのは、知られなかったこともあるが、外洋航海時代を迎えて船舶

が大型化し、さらに強力な推進力を必要とするようになってきたためであろう。東南アジアと日本には伝わり、和船の櫓に取り入れられ、途中に繋ぎ目を入れてその効力をさらに高めたものに改良された。

この部分は Z・R ではずっと詳しいが、avron に当たる語は出てこない。Z の写字生か編訳者が、理解できなかったか同義語として省いたのであろう。他版では、FG のみ「風のない時は avirons で進む」³⁷とあるが、rame は出てこないことからして櫓の同義語として使われており、櫓であることが認識されていたか疑わしい。他は、rame に当る語しかない。この点では、F が最も古い形を残していること、そして FG がそれに次ぐことが確認される。

近代語訳では、ポーチェの FG を訳したユールは avirons に sweeps <大櫓>を、F を訳したムールは avron にやはり sweeps、rames に oars <オール>を当てた³⁸。中国船で使われる櫓は確かに大きいものであった(約13尺4m)が、その大きさはガレー船等の櫓と比べて変わりなかったし、avron と rame の違いは前述のごとく語源を異にすることにあるだけで、大きさの違いを意味するわけではない。さらにベネデットはそのイタリア語集成訳で、同義反復と見たのであろう、vanno anche a remi <櫓でも進む>と avron を切り捨て、それがリッチの英訳 oars と愛宕の和訳<櫓>にも受け継がれた³⁹。かくして、このマルコの文は全く注目されることなく忘れられている⁴⁰。

そして最後に修繕の話があって、船の記事は終わる：

「またいいですか、大きい船が化粧直しつまり修理する必要があったり、一年航海したりすると、次のように修繕するのですよ。すなわち、船の回りじゅう二枚の板の上にもう一枚板を打ち付ける。こうして三枚になる。そしてさらに詰め物をして塗る。これが彼らのする修繕です。次の修繕の時にはさらにもう一枚板を打ち付ける。板が六枚になるまでこのようにする」(F)

前述出土船は4枚の板が打ち付けてある。とすると、3年目あたりで沈没したものか。

3.3 筵帆

一方 Z には、「次に、船が航海に出るときその旅で商売が順調に行くか不調か実験する方法をお話しよう」と始まって、さらに別の記事がある：

「船の人々は藎草を編んだもの、つまり筵を手取る。その筵のそれぞれの角と辺に綱が一本結びつけられ、つまり綱は八本になり、それら全てのもう一方の端が一本の長い麻縄に結ばれる。次に、誰か痴れ者か酔っ払いを見つけ出し、そいつを筵の上に縛り付ける。正気の者や素面の者は誰もこうした危険に身をさらさないからである。これは、風が強く吹くときにする。そして、筵を風に向かって立てる。すると風は筵を持ち上げて高く揚げる。人々は長い麻縄を握っている。もし筵が、空中にあって風の吹く方に傾くと、彼らは麻縄をいくぶん自分の方に引っ張る。すると筵は真っ直ぐになる。麻縄を緩めると、筵は上昇する。もしまた傾くと、麻縄を引っ張ると、筵は真っ直ぐになってまた上昇する。そしてまた麻縄を緩める。こうして、麻縄はとても長いから、見えなくなるほど高く上る。このような実験で次のことが

分かる。すなわち、もし筵が真っ直ぐ高く上ると、船はこうしてなされた実験により、安全で順調な航海をするのだという。そして商人は皆、その船で商品を送ったりそれに乗って航海するために駆けつける。もし筵が上がらないようだと、その実験が行われた船には商人は誰も乗ろうとしない。その旅は成就せず、多くの災難に出会うだろうという。そのためその船はその年は港に留まる」

「筵」と訳したが、原文は *una cratem, id est unum graditium, de viminibus* <細枝を編んだものつまり格子組み>で、藺草あるいは蒲・籐・葦などを編んだものことであろうが、それで凧のように空に揚るのか覚束ない。「格子組み」というのは、その骨組みを指しているのかもしれない。前の船のところには記載はなかったが、篷と称される当時の帆はまさにそうした素材を格子に組んだ割り竹で挟み、それを帷子状に折り畳めるようにしたものであった。であれば、風が強ければ筵でも十分その役に立ったであろう。深い湾の奥にあって周辺に小山の点在する泉州の町は、今も強風で知られる。

泉州城の北西約7キロの九日山に、「祈風送舶石刻」という遺跡があり、海と港を望む断崖の壁を削って文字が刻まれている。宋代に郡の長官や市舶司の役人たちが、蕃船の順風満帆を海神の通遠王に祈願して刻んだものだという⁴¹。それがいわばお上の行事であったとすれば、船乗りたちは船上でこうした筵を揚げて占ったのであろう。

泉州には、航海の神がもう一つあった。媽祖女神である。その信仰は、10世紀後半東隣りの興化路の小島湄州島に始まり、宋元代には福建省沿岸各地に広まっていた。泉州でも1196年南門徳済門内に建てられたその廟は、今でも中国最古最大のものの一つである。その信仰が海運にとって大いに益多いことを見抜いたフビライは1278年、それまで単に「夫人」あるいは「妃」であった媽祖を「護国明著靈惠協正善慶顕濟天妃」に冊封して昇格させた。これに伴って、それまで「順済廟」⁴²と称されていた媽祖廟も「天妃宮」に格上げされた（天后宮は清代1684年以來）。1281年には「護国明著天妃」、1289年には「護国顕佑明著天妃」にあらためて冊封している⁴³。

コカチン姫を伴ってベルシャに還る使節の一行が順風を待ってこの町に留まっていたのは、ちょうどその頃である。フビライ政府の派遣とあれば、必ずやこの天妃宮に参って航海の安全を祈願してもらったことであろう。同道したのであれば、ポーロたちもまたそれに参列せずには済まされなかったに違いない。が、その記事はなく、代って筵凧がある。媽祖は偶像崇拜の一種であって、それに対する批判はあらゆる所で繰り返してきたのに対して、筵凧は初めて見聞する信じがたい驚くべき習俗であり、驚異の一例としてまさに同書にふさわしいものだったからではないか。

この風習を今に伝える文献は中国にもないという。航海の安全と順風を祈る石刻や媽祖信仰が公式のものであったのに対して、酔っ払いを縛り付けた筵凧はいわば禁じられた遊びであったためであろう⁴⁴。その意味では貴重であるが、媽祖信仰についてもこの精緻さで記載されてあれば、前の地フジュ福州で隠れ信徒に出会って話を聞いたというマニ教の記事に続いて、今も東南アジアから日本にまで広く見られるこの民間信仰を紹介する最初の文となり、同書のアジア宗教地図をさらに豊かなものにしたであろうにと惜まれる。ただしこの記事もZにしかなく、その情報がポーロのメモからであれあるいは他の誰かが

ら提供されたのであれ、別の機会に書き加えられた可能性も否定できない。

これでインド海の船の話を終り、いよいよザイトンから出帆するのであるが、その前にといいて次章はジパングである。

4. おわりに

その後、明の海禁政策とともに蕃船の姿は消え、清代には土砂の堆積によって港はなくなってしまった。が、晋江は今も潮を逆流させ、順濟橋は橋脚の尖端でそれを二つに分けている。800年にわたるその流れに堪えかねたのか、ごく最近中央部が崩れてしまったが。留従效の子城はもはやないが、刺桐は春になると真紅の花を咲かす。元の羅城も明清の城壁も残っていないが、西の臨漳門と北の朝天門は復元された。ティンジュの町はまだ確認されないが、港からは景德鎮や竜泉の磁器が運ばれる。インド海にまで出かけることはもはやないが、河口には何隻ものジャンクが浮かぶ。その船上で筵風が揚げられることはないが、強風は変ることなく吹き抜ける。提拳市舶はもうないが、南門の街区には回教徒たちが今も住む。市内には開元寺と鎮国・仁寿の二つの石塔、清浄寺のモスクと回教徒墓地、天后宮と媽祖神が、近郊には何度か改修されたが洛陽橋も安平橋も往時のままに残っている。また、当時もそうであったのかは分からないが、オレンジ色の瓦の屋根、真ん中の膨らんだ円柱で囲まれたテラス、黒いギザギザ模様の入った同じく褐色の壁タイル、ネギ坊主形の窓枠の家並み、太い石の円柱や角柱に支えられたアーケードと石畳の街並みと、泉州は今もザイトンである。

アレクサンドリアと並び称された泉州はもうない。が、磁器がポースリンとして知られるごとく、また日本がジパングとして知られたごとく、泉州は今もザイトンとして存在する。それを在らしめたのは、マルコ・ポーロの書であった。

[註]

- 1) 1. F: Luigi Foscolo Benedetto, *Il Milione*, Olschki Firenze 1928.
2. Z: *Marco Polo Milione*, a cura di Alvaro Barbieri, Ugo Guanda, Parma 1998.
3. R: Giovanni Battista Ramusio, *I viaggi di messer Marco Polo, gentiluomo veneziano, Navigazioni e Viaggi*, a cura di Marica Milanese, Einaudi Torino 1980 (1559), vol. 3 pp.75-120.
4. FG: *Le Livre de Marco Polo, citoyen de Venise*, par M.G.Pauthier, Didot, Paris 1865.
5. TA: *Milione*, con Indice Ragionato di Giorgio R. Cardona, a cura di Valeria Bertoluzzi Pizzorusso, Adelphi Milano 1975.
6. VA: *Il Milione Veneto*, a cura di Alvaro Barbieri e Alvise Andreose, Marsilio Venezia 1999; *Marco Polo*, Ms. CM211 della Biblioteca Civica di Padova, a cura di Hideki Takata, Osaka International Univ. 2000.
7. P: *Manuscripts and Printed Editions of Marco Polo's Travels*, by Shinobu Iwamura, The National Diet Library Tokyo 1949; *Il Milione*, di Luigi Giovannini, Edizioni Paoline Roma 1985.
- 2) F : CLVIII - Ci devise de la cité de Çaitun, pp.159-61 「ザイトウン市について述べる」; Z : 90, pp.242-51; R : Vol.II Cap. ultimo - Della città e porto di Zaithum e città di Tingui, pp.248-9 「ザイトゥムの市と港ならびにティングイ市について」。
- 3) [] 内はベネデットの校訂。斜字体は F・Z・R 相互間の異なりを示す。
- 4) 桑原隲藏『蒲寿庚の事蹟』平凡社東洋文庫1989,pp.70-71; 前嶋信次「泉州の波斯人と蒲寿庚」『シ

- ルクロード史上の群像』誠文堂新光社 1982、pp.95-158.
- 5) イブン・バットウータ『大旅行記』7、家島彦一訳注、平凡社東洋文庫、2002、pp.26, 78-9.
 - 6) 写真①参照。
 - 7) 蒲寿庚が泉州の提挙市舶の職にあった年代は明確でないが、桑原前掲書によれば、1250年頃からの約30年で1284年を最後として記録が見えない（pp.213, 255）。
 - 8) オドリーコ（1265? - 1331）の東方行は1318 - 30年、泉州滞在は1322 - 24年頃。Anastasio Van den Wyngaert, *Sinica Franciscana*, vol. 1, Firenze Quaracchi Collegio S.Bonaventura, pp.413-95；拙稿「オドリーコ・ダ・ポルデノーネの東方」『大阪国際大学紀要国際研究論叢』Vol.18-1, 2004, pp.35-55.
 - 9) イスラム教徒の墓は、東門外の霊山に「伊斯蘭教聖墓」として残っている。キリスト教徒は街ではイスラム教徒と雑居しており、死後もその墓地に葬られたとみられる：Cf. 前嶋信次、前掲書 pp.133-44.
 - 10) 2006年7月23日真ん中の橋桁が、8月10日中央の大部分が崩落した。写真②参照。石筍橋の名は、その橋が架かる西門外にある高さ6m余の筍（筍）石（新石器時代）に由来する。
 - 11) 写真②参照。
 - 12) Cf. Paul Pelliot, *Notes on Marco Polo*, Imprimerie Nationale Librairie Adrien-Maisonneuve, Paris 1959, 'Porcelain', pp.805-12.
 - 13) 遺品リストには、scudela de cana <碗> 2点と piadena de cana <皿> と piadenele de cana <小皿> 各1点記載されている。これらが特別なものであるか明確でない。ヴェネツィアのサン・マルコ大聖堂にはマルコが持ち帰ったと伝えられる白磁の香炉があるが、もちろん伝説である：Cf. G.Orlandini, Marco Polo e la sua famiglia, 《Archivio Veneto-Tridentino》IX 1926, pp. 1 -68.
 - 14) 宋應星撰『天工開物』藪内清訳注、平凡社東洋文庫、1987、p.141.
 - 15) ダントルコール『中国陶瓷見聞録』小林太市郎訳注・佐藤雅彦補注、平凡社東洋文庫、1979、pp.71-84.
 - 16) Rは、16世紀中頃（1557年）ヴェネツィアのジャンバッティスタ・ラムージョがいくつかの稿本からイタリア語集成訳したもので、Pを底本としているが、Z（ゼラダ稿本）の兄弟写本であるギジ稿本（Z¹）から多くの記事を探っている：拙稿「ラムージョ「マルコ・ポーロの書序文」（1）—マルコ・ポーロ伝記研究」愛媛大学教養部紀要、vol.24, 1991, pp.53-106.
 - 17) パリ国立図書館写本 Ms fr.1116, f.74v-a, l.21（フランス語写本1116、第74葉表、第1欄（左欄）、第21行）。フランス地理学協会版は Tinugui、ペリオ（註19）は Tinugiu に読む。
 - 18) F：CLVI—Ci devise dou royaume de Fujiu「フジユ王国について述べる」、pp.155-56；Z：88, pp.226-33；R：Vol.II—Cap.76, p.246.
 - 19) Henry Yule & Henri Cordier: *The Book of Ser Marco Polo*, vol. 2, Amsterdam Philo Press 1975 (London 1903-20), pp.234-46；Pelliot, *ibid.*, 'Tingiu' pp.853-56.
 - 20) ペリオの説（前註19）は1959年のものだが、戦後の発掘の資料は用いられていない。
 - 21) 愛宕松男『東洋史学論集』第5巻、三一書房、1989、「マルコ・ポーロ旅行記地名考訂 2.Tyunju市とは泉州である」pp.339-48.
 - 22) 引用されている文に見る限り、16水というのは晋江のそれぞれの区間で流れ込む川であって、河口ではない。また、ポーロのテキストでは「支流に分かれる」であって「合流する」ではない。
 - 23) 愛宕は、Tyunjuを地理学協会本の読みとして採るが、Fの同協会版は Tinugui（p.180）、ベネデット版は Tiungiu（p.160）である。
 - 24) Luigi Foscolo Benedetto: *Il Libro di Messer Marco Polo Cittadino di Venezia detto Milione dove si raccontano le Meraviglie del Mondo*, Milano-Roma, Treves-Treccani-Tumminelli 1932.
 - 25) Benedetto, *ibid.*, pp.273-77。同じく主要テキストを集成英訳したムールは、Rのこの文を本文に組み込まず、註に別記するに止めている：A.C.Moule & Paul Pelliot, *The Description of the World*, vol.I, New York AMS Press 1976 (London 1938), p. 352.
 - 26) Aldo Ricci, *The Travels of Marco Polo*, London Routledge 1931, pp.263-66.
 - 27) 愛宕松男訳註『東方見聞録』2、平凡社東洋文庫 1987（1978）、pp.113-21.

- 28) 佐々木達夫『元明時代窯業史研究』吉川弘文館1985には、さらにその後の発掘と研究を踏まえて、泉州管内に「南安円峰窯」「南安前窯」「晋江磁窰窯」「同安窯」が挙げられている (pp.40-43)。
- 29) F:CLV-Ci devise de la grant cité de Tanpingiu「大タンピンジュ市について述べる」pp.154-55; Z: 87, pp.222-27; R: Vol.II-Capp.70-72, pp.244-45.
- 30) Giovanni Boccaccio, *Decameron*, a cura di Vittore Branca, Einaudi, Torino 1987, pp.759-74; 拙稿「ジバングの系譜(3) - ボッカッチョ『デカメロン』の東方」『大阪国際女子大学紀要』vol.23-1、1997、pp.19-43.
- 31) F: CLIX—Ci comance le livre de Indie et devisera toutes mervoilles que i sunt et les maineres des jens「ここにインディエの巻始まる、そこなる全ての驚異と人々の種類を述べる」pp.161-62; Z: 91, pp.252-58; R: Vol.III-Cap.1, pp.250-51.
- 32) 1973年江蘇省如皋県で出土した唐船。『図説中国文明史6 隋唐—開かれた文明』創元社、2006、p.158。
- 33) ジョセフ・ニーダム『中国の科学と文明』第11巻「航海技術」、思索社、1981、p.50.
- 34) 前掲『天工開物』p.185; 前掲『図説中国文明史6 隋唐—開かれた文明』p.158。
- 35) イブン・バットウータ、前掲書、p.29。ただし家島註によると、「動詞ジャッザファ (jadhdfafa) はくオールで船を漕ぐ」の意味」(p.84) で、特別な語は用いられていない模様。
- 36) 大倉隆二「『蒙古襲来絵詞』を読む」海鳥社 2007; 伊原弘編『「清明上河図」をよむ』勉強出版 2003; 山形欣哉『歴史の海を走る』農文協 2004。
- 37) FG p.535.
- 38) Yule II p.250; Moule p.355.
- 39) Benedetto p.279; Ricci p.268; 愛宕(2) p.126。
- 40) 山形欣哉はこれが「櫓」であるべきことを指摘している(前掲書 p.66)。
- 41) 佐久間博正「泉州南安県九日山の祈風」『駒澤史学』vol.36, 1987, pp.66-89.
- 42) 上述「順濟橋」の名は、南門の外にあってこの廟に通じていたことに由来する。
- 43) 朱天順『媽祖と中国の民間信仰』平河出版社 1996, pp.71-74.
- 44) 媽祖の靈驗譚の一つに「掛席泛槎」、嵐の海を席を掛けた槎(筏)で渡ったという伝説があり、媽祖信仰と結びついていたことも考えられる: Cf. 朱天順、前掲書 pp.40-44. ただし、それが記載される『天妃顯聖録』は明末清初のものとのこと。



写真① 元代泉州市街図(泉州博物館)



写真② 順濟橋(東端下流側、筆者撮影 09.9.1)